

英語教育とコーパス

朝 尾 幸次郎

提案者の先生方は個別にお話をされます。私は英語教育とコーパスという広い部分から提案してみたいと思います。子どもの言語教育情報研究科は今年で2年目です。来年3月、初めて修了生を送り出します。2年目の大学院生は課題研究をしておりますが、その中間発表が9月にありました。参加して聞いたのですが、とても面白かったです。現職の高校の先生で日本語教育専攻の方は、高校生が「すごい」「すごく」の二つをどのように使い分けているかという研究をしておられます。「すごい」「すごく」というのは、場合によっては入れ換えて使うことができることばであることに私は気がつきませんでした。「すごくうれしい」という意味で、「すごいうれしい」と言う場合があります。なぜ「すごい」ということばが「うれしい」につくのか。「すごくうれしい」ならわかるけれども「すごいうれしい」という言い方も実際にはよくみられる。この方は高校生が「すごい」「すごく」をどのように使い分けているかということを高校生の作文から研究をしておられます。発表を聞きながら「そうだよな、『すごくうれしい』の方が本当は正しいのだけど、言語感覚がない人は『すごいうれしい』と言ってしまっただろうな」と考えていました。「このテーマ、すごいおもしろい」そのとき、アレッと気がつきました。「アレッ、今、ぼくは声には出さなかったけど、自分で「すごいおもしろい」と頭のなかで言っていたことに気づいたのです。自分ではこのような言い方は使わないと思っているのに、実際は使っていました。私は日本語のネイティブ・スピーカーですが、ネイティブであるからわからない、見えてこないものがあるわけです。

さて、教師にとってコーパスというものはどういうものであるか、まず、お話ししてみたいと思います。その後で、反対に学ぶ側、生徒にとってコーパスとは何か、コーパスは英語教育にどういう意味をもつのかということをお話ししてみたいと思います。

「すごい」と「すごく」の例はとてもおもしろい。コーパスで調べてみたいと思いました。日本語のコーパスを持っていませんので、てっとり早くGoogleで検索してみました。Googleはコーパスではありませんから正確な情報は得られませんが、大体どういう傾向があるかを見るためには役立ちます。コーパス代わりにGoogleを使っておられる方も多いでしょう。「すごいうれしい」という言い方は驚いたことにたくさん出てきました。

さらに詳しく調べるために『朝日新聞』のデータベースで過去の記事から、「すごいうれしい」「すごくうれしい」が現れる記事を検索してみました。データベース収録の一番古い記事は1984年のものです。1984～1992年の9年間に「すごいうれしい」が51回、「すごくうれしい」が1回現れています。93～96年、97～99年についても同じように調べてみました。『朝日新聞』データベースの仕様で、最初は9年間、次は4年間、次から3年間、3年間、2年間となってい

て、時代的に正確に比べることはできませんが、「すごくうれしい」と「すごいうれしい」の比率はわかります。「すごくうれしい」と「すごいうれしい」の比率はほぼ20対1です。「すごくうれしい」と言う人が20人、「すごいうれしい」という人ががひとりという割合です。新聞ですから、記事になる前に校閲部の人が表現のチェックをしているはずですが、それでも「すごいうれしい」という言い方が現れています。このほとんどは人のことばの引用です。

年 代	すごくうれしい	すごいうれしい
1984-1992	51	1
1993-1996	85	1
1997-1999	151	3
2000-2002	189	5
2003-2004	137	6

たまたまアテネ・オリンピックの記事におもしろい例が見つかりました。体操の塚原直也が言っていることばです。このすぐ後に米田功雄のインタビューが出ています。これは『朝日新聞』の校閲の人が見逃したのか、あるいはこのまま引用したのかわかりませんが、「すごいうれしい」「すごくうれしい」が隣り合って出ているのはおもしろいと思いました。

「重圧、力に昇華 育った新世代 体操男子団体 アテネ五輪2004」(『朝日新聞』2004年8月17日夕刊)

塚原直也 僕自身の演技はミスが出て、周りのみんなに助けられた。(金メダルは)目標にはしてきたが、本当に取れるかはわからなかったの、すごくうれしい。

米田 功 すごいうれしい。鉄棒勝負と思っていた。みんなが「いつも通りで大丈夫」と送り出してくれた。終わったら米国選手が失敗したと聞き、ほんまに行けると思った。

「すごい」ということばのもともとの意味は「心がゾツとする」という意味です。おもしろいことに英語にも同じような例があります。元来「恐れをいだかせる」という意味のawfulは現在では「すごい」という意味でも使われます。このawfulは形容詞ですが、最近、副詞のawfullyと同じように使われています。映画のせりふをデータとしたコーパスでawfulが形容詞本来の用法で使われているか、副詞的に使われているか調べてみました。Yeah, well, awful sorry about that, mate. (ほんとにすまなかった) このようにawfulが副詞的に使われています。このコーパスでは、awfulが副詞的に使われている用例は7つありました。それに対し、I'm awfully sorry about this, George. (ジョージ、このことではほんとにすまない)のようにawfullyという本来の副詞で現れるのは25例みつかります。25対7です。日本語の「すごく」「すごい」という比率からすると英語の方がawfulを副詞的に使う方がずっと多いようです。

英語では、awful sorryとawfully sorryはどのように使い分ければよいのでしょうか。このような疑問は英語のネイティブでない私たち外国人にはなかなか解決できません。英語用法がわからないとき、外国人である私たちはこれまでネイティブに聞くしかありませんでした。ところが、

コーパスが事情を一変させました。コーパスを使うことで、ネイティブに頼らなくても、ある程度自分で解決できるようになったのです。われわれは日本人でありながら英語の教員をしているというハンディキャップがあります。英語に対する言語的な直観がありません。ネイティブでないというハンディキャップからコーパスは私たちを解放してくれます。

ところが、逆にネイティブであるからこそわからないということもあります。ある国語学者が日本語を学んでいる留学生から質問を受けました。「先生、日本語には同じような意味のことばがいろいろあります。どちらを使ったらいいか迷います。日本語には「やはり」と「やっぱり」というふたつの言い方がありませんね。「やはり」と「やっぱり」、どちらが普通のことばですか」。私たち日本語のネイティブでも、突然、このように聞かれると答えに詰まります。その先生も困りました。しばらく考えた後、腕組みをしてこう答えました。「うん、そうだね、『やはり』の方が普通だね、やっぱり」(笑い)。ネイティブであるからこそ見えない、わからないこともあるわけです。ネイティブでないハンディキャップからの解放、ネイティブであることからの解放、このふたつをコーパスはわれわれに与えてくれます。教師にとってコーパスが大きな意味をもつのはこれがその理由です。

次に英語を学ぶ学習者にとってはどうでしょうか。生徒にとっては外国語を学ぶむずかしさは、読んだり、聞いたりすることよりも、書いたり、話したりするところにあります。つまり、プロダクションです。読んだり、聞いたりする場合には文法的に正確で、言語的に適切なテキストがすでに与えられています。しかし、プロダクションでは言語的正確さ、適切さを自分で作り出さなければなりません。言語的には正しくても「こういう表現は使わないよ」というのはたくさんあります。日本語を学ぶ留学生が話すのを聞いていて「意味はわかるけど、変だな」と感じることはありませんか。「人類に未来はあるのでしょうか」と言うべきとき、日本語を学ぶ外国の人はよく「人類に未来はありますか」と言うことがあります。私たちも外国語を書いたり、話したりするときには同じようなことをしているわけです。正しさ、適切さを作り出すのは外国人にとってはとてもむずかしいことです。

今朝のワークショップで「あなたは完全に正しい」という意味を表そうとする場合、rightにどのような副詞をつければよいか、コーパスを使って解決するという実習をしておられました。これまでこのような場合には和英辞典を使ってきました。しかし、和英辞典は実は英語を知らないと使えません。「完全に」という項目を調べると、perfectly, totally, entirelyといった語が示されます。しかし、そのどれを使えばよいのかはわからないのです。これらの意味の差、使い方の違いを知らなければ、和英辞典が使えません。英語がわからないから和英辞典を使うのに、それを使うためには英語がわかっていなければならない。なんともふしぎな堂々巡りの矛盾です。

「ぜひ」という表現を使いたい時、和英辞典で「ぜひ」を検索すると、surely, certainly, be sure to do, at any cost, at all costsなどがみつかります。しかし、どれを使えばいいのかわかりません。こういうときに大きな力になるのがコーパスです。星新一の『エヌ氏の遊園地』という短編集には英訳があります。この作品を使い、日本語と英語の表現を対応させて、パラレルコーパスを作ってみました。そこから「ぜひ」を検索してみたのが次の3例です。

「また、なんかなさる時には、ぜひご利用下さい」

The next time you're going to do something, by all means take advantage of my services.

「ぜひ教えてください」

“By all means, tell me.”

「急に呼び出して来ていただき、ご面倒をかけます。ここで、ぜひあなたの力をかりたいのです」

“I'm sorry to bring you out so suddenly, but we really need your help.”

上では by all means の例が 2 つ、really の例がひとつ出ています。この例でわかるように、by all means は命令文と一緒に出てくることが多いのです。2 番目の例は相手が何か言ったことについて「そうですとも」という強いた承の意味を表す受け答えの表現です。自分が言いたいことがわからない場合はパラレルコーパス、あるいは一般のコーパスから検索をして自分が求める表現を探し出すことができます。ネイティブに聞かなくてもわかる、自立した学習者になることができるというのが、学習者にとってのコーパスの大きな意味です。英文ワープロにはスペルチェックの機能がついています。ワープロがもっと発展し、コーパスの機能がついて、単語をクリックするとそのコンコーダンスを表示してくれるものがあれば便利になるだろうと思います。

このようなしくみは実は理科系ですでに古くから使われていました。理科系の文章は「酸素と水素を化合させる」というような定型なものの特徴です。ですから、「窒素と酸素を化合させる」と言う場合には、この文で「酸素」を「窒素」に変えればいいのです。このため、理科系では定型的な表現を集めた辞書というか表現辞典が以前から広く使われてきました。辞典と言うよりもコンコーダンスです。『科学技術英和大辞典』という大きな表現集ではキーワードを含むセンテンスを全部抜き出して日本語訳をつけています。センテンスごとにキーワードを抜き出して出しているだけなんです。これは私たちがやっているコーパス言語学と同じ考えです。これは理科系の文章が定型的な文章だから可能だったのです。

理系の人と文系の人では語学に対する考え方に違いがあるようです。私たち文系は英語の力をつけてから英語を書こうとします。しかし、理系の人は定型的な表現集を使って、そこからモデルとなる文を見つけ、表現を入れ替えることで文章を書いていくという考え方があるようです。いわば、力づくで英語を書いていくのです。

コーパスはこれからの英語学習、英語教育にとってどのような役割を果たすのでしょうか。ひとつは、先に述べましたように、ネイティブでないというハンディキャップからの解放、もうひとつはネイティブであるというハンディキャップからの解放です。生徒、学習者にとっては言語的な正しさ、適切さを作り出さなければならない苦しみからの解放です。しかし、これは決して「コーパスを使うと和英辞典を使うより便利だ」ということではありません。技術というものの本当の意義は「便利だ」というところにあるのではなく、それが社会、生活、学び方を変えていくところにあります。コーパスは英語教育のあり方を考えるものでなければなりません。

コーパスを使うと、学び方、教え方はどのように変わるのでしょうか。語学教育に限らず、これまでの教え方、学び方というのは基本的に知識の移転です。「教える」ということで私たちがイメージするのは、教師の持っている知識をそっくりそのまま生徒に移転するというイメージ

です。伝統的な文法の教え方、学び方はその典型的です。「これを覚えなさい。そうすると英語ができるようになります」というものです。知識を本や教師から生徒に移転させることが学びであるというのです。

これはとても根強い考えで、インターネットが普及した今日でも、インターネットの意義を効率的な知識の移転のためのメディアという考えが広く見られます。インターネット上ではどこでも競ってコンテンツを公開しようとしています。コンテンツを作ろうというのは結構なことです。しかし、現在見られる多くのものは、本に書いてあることをネット上に出しているだけにすぎません。本で読めるものをネット上に置いただけです。インターネットという新技術を使ってはいるものの、そこで行っているのは「知識の移転」という以前と変わらぬ学び方です。

学びというものには感動とか、驚きの気持ちが伴うものです。コーパスを使うと「あ、そうか」という発見があります。コーパスを使うと学習者がみずから文法、使い方を発見していきます。教師に教えてもらうのではなく、自分で発見し、学ぶのです。このため、今私たちに必要なものは学習用コーパスです。ブラウンやBNCは研究用コーパスです。これらを教室に持ち込んでも、大量の用例が出てきます。読み切れないほどの大量の用例です。難解な用例も検索されます。学習、教育に必要なのは小規模で簡単に検索できる、質のよいコーパスです。現在、言語教育情報研究科を中心にして教科書データベース、つまり、教科書そのものを全部コーパスにしてしまおうという計画が進んでいます。ここにコーパスを利用した新しい英語教育の可能性が見えてくるように思います。